

美紗の会

たより

夢のあとさきへの一本の道

西松 布咏

今年の旅は軽井沢から始まった。

八月三十日 柔らかな陽差しに木々を渡る風が心地よい中軽井沢の高原に立つ鶴間邸で美紗の会の鶴間茂登子さん主催による「第六回鶴間の会—幽玄と粋—思い草 葉末に結ぶ露の間も」公演に出演した。



一部は江戸唄の演奏。「ほんのりと」「宵の謎」切なく揺れる恋心が見え隠れする小唄で始まり、締め「高砂」を厳かに唄い、幽玄の世界への橋がかりとし、佐久間二郎師に引き継いだ。

佐久間氏は三歳で能面に興味を持ち、能楽師を志し高校卒業後自力で観世流のもとへ内弟子に入り、爾来八面六臂の活動をされている若き能楽界のホープである。快活な話の中にユーモアのエスプリを効かせたワークショップで観客の心を引き寄せた後、江戸唄と能楽のコラボレーションとして「松風」を共演した。

その昔修行した富本節「松風」の冒頭の語り「波こもともや須磨の浦 辛や隠れん 袖笠を——」で始まると、汐汲女松風の装束をまとった佐久間師が謡と共にそこそかに登場する。島流しされた在原行平との切ない恋は別離で終わり、やがて松風は次第に狂ってゆく。

元禄以降衰退した哀切極まる富本節の江戸の粋と優美な能楽の幽玄が見事に融合し、共演者同士も観客も一体となり忘れられないひとときとなった。

九月二十六日「江戸唄を味わう その一」を発足し赤坂クラブで「江戸唄をデザインする・四畳半から宇宙へ」を美紗の会の照沼さんらの協賛で行った。私には以前から胸に秘めていた思いがあった。四季折々のお座敷で、酒や旬の食材のように江戸唄を味わう会がしたい。のつぶやきを卓球ラケットでキャッチ！の浅葉克己氏が「しつらい」を担当して下さった。

当日はデザインの仕事で鍛えられたスタッフの見事な連携プレイで狭い座敷が瞬く間に異次元の世界にしつらえられてゆく。床の間に浅葉さんの手による「フランクシー・こけし」その壁に写実の「三世市川高麗蔵の志賀大七」の絵。手土産として開演前



に浅葉さん秘蔵の「春画」を白手袋をはめて覗き見る趣向。そして舞台正面に「MARS・2014年」と題した屏風。やがて行灯が仄かに点され、白のスベースに火星の表面を墨や写真で特殊加工した銀河宇宙が浮かび上がると、吉原へようこそその清澄きでシャンシャンと江戸の世界が広がってゆく。端唄・「忍ぶ恋路」「嘘と誠」「今朝の雨」小唄「まさん」と「哥沢「身はひとつ」そして最後は旗本と遊女の恋の果て「質輪心中」それはまさしく「闇の夜に吉原ばかり月夜かな」で客と遊女の四畳半から宇宙へのめくるめく世界。あわただしく時が過ぎてゆく現代にこんな末の間の大人の世界があつていいと思う。その後は菊月の会席料理で盃の酒を差しつ差されつ。尽きることのない浅葉さんの軽妙な語り口に揺られた乗り合舟の酔い心地だった。

十月二十六日岐阜・高山の遊朴館ギャラリーで「書・三味線・ピアノによるコンサート。夢のあとさき」を開催した。前号の「たより」に岐阜とのいきさつを書いたが美紗の会の磯部英子さんも高山にご縁があり、いつかは恒展を開き、書と三味線の

コラボレーションをしたいとの夢を語っていた。美夢の会・世話役加藤多貴子さんの亡きご母堂の古里は高山。それぞれに所縁のある三人がモダンなたたずまいのギャラリを訪れた時、すでにコンサート「夢のあとさき」は始まっていた。古代文字の書を模索し続けている磯部さん、孟南榮の今回の個展は甲骨・金文を主題とした文字で今に生きる葛藤、夢と幻、光と陰を美濃和紙に込めてゆくという。会場のグランドピアノを見た時、私は伝統「前衛のコンサートにしたい」と昨年「忍ばずの女」で共演したシンガーソングライターの辻準人氏を想った。

一部は伝統の江戸唄とした。江戸の東に流れる隅田川「夕暮れ」と西を流れる長良川の小唄「鶴飼して」で始め、秋の風情を織り込んだ「秋の夜」「さびしき夢の柳橋」そして岐阜とのお縁のきつかけとなった詞・松岡正剛 曲・西松布由による創作「磯部好み」

二部は前衛の曲目にしたいとピアノの辻氏と何度も話し合い、リハーサルも回を重ねた。十代半ばから独学で作曲を始め特定の言語を使わない「創作言語ピアノ弾き語り」という独自のスタイルを貫いてソロ活動をしている三十代の若い辻氏と六歳で長唄に出会い爾来様々な三味線音楽の会得に苦しみ抜いている私との接点は「間」と「哀愁」それを異なるジャンルで表現したかった。

当日は 辻氏のピアノ「序章」で厳かに始まり、私が三味線で山本勘右の前衛詩「DEEP TODAY」を唄う。そして辻氏の弾き語り「無題」「黒髪と沈黙」と続いた。私は何度も演奏している北園克衛の二曲にピアノのアレンジをお願いした。「ブルー」では寄せては返す音で晩年の北園の内面をえぐるような激しい波を。「黒い肖像」では壁に塗り籠められた孤独なうめきの三味線に口ツクの様な激しいリズムで合わせてくれた。そして最後の「アユタヤの唄」

は作詩の小野原教子さんの朗唱に続き、つぶやくようなピアノの流れる身をまかせ、三味線を置いて心の想うままに唄った。ミクロ単位の三味線と唄との微妙な間合に身を削る演奏を忘れるようなピアノの音は手からさらさとこぼれる砂漠の砂のように刹那心に響いた。

想いは 思いはどこへ置こう
目をつむる 坐る 指を組む
暑さの中を朦朧として歩き回る
頭の中の古い都
黄色のモノクルで眺めても
手の届きそうなその色の
服の人が歩いてゆく
砂埃と草履の音をたてて歩いてゆく

十数年前、この詩に出会った時、遠い昔に見た風景がセピア色に蘇ってきた。パンコックからベナンに向かうプロペラ機の窓から見下ろした一本の道をひとりの人が歩いてゆく。腰に布を纏ったその背中は男か女か遠く解らない。次第に水平線のかなたに点となって遠のいてゆく後姿。あの時 手の届かなかった後姿。いつしかこの風景は私の歩む道と重なって行った。

一段落したある日、身の回りの整理をしていたら、引き出しから新聞の切り抜きが出てきた。青山円形劇場で新しい感覚の邦楽をと第三回リサイタル「哀すれば唄」を主催した時に掲載された産経新聞「ひとと広場」の記事。

「私にはこの道しかない」と心に決めました。ソウルミュージックのように聞く人の魂を揺さぶるようなハードな邦楽を目指します」の文字がまぶしかったです。それは二十五年前のこと。

はたしてこの情熱をまだ失っていないだろうか：未だに果てない一本の道を歩んでいる私。

八月から始まった旅は異分野で活躍するアーティスト三人から数々の刺激と情熱を享受した。
まるで夢のあとさきだったような貴重な時間を心の糧に果てない一本の道を又来年も歩んで行こうと想う。

人生の愉しみ 私の小唄事始め

後濱 ゆき子

始まりは正月でした。今年の目標として、「小唄を習う」と心に決めたのです。そこにいるいる調べてみたのですが、「これは！」と思えるお師匠さんが見つかりません。もう無理かもしれない、と考えるようになっておりました。

季節は過ぎて、夏。八月の終わりのことです。夏バテ気味の身体を癒そうと、東急東横線・白楽駅近くの鍼灸院に治療を受けに行きました。帰りの道すがらふと目に飛び込んだのが「三琴堂（三味線、琴）の看板です。『そうだ、この三味線屋さんに聞いてみよう。』早速、小唄のお師匠さんをどなたかご存じないでしょうか？』と聞いてみると、すぐに教えて下さいました。『西松布由先生なら間違いありません。ネットで演奏も聴けるから観てご覧下さい。』はやる心を抑えながら急ぎ帰宅。ネット演奏を聴きました。そこに書いてある電話番号にすぐに電話致しました。

見学させて下さいという私のお願いを先生は快く受け入れて下さり、「いついらっしゃる？」と聞かれ、九月の初めにお稽古場に伺いました。お師匠さんとお弟子さんのお稽古の様子を拝見し、その場で入門させて下さいとお願いしました。

唄にあまり自信のない私は、暫くはのんびり行こうと勝手に思っておりました。でも先生から「私が

仕上げてみせるから是非出なさい。」と強く勧めて頂き、突然「美紗の会のつどい」に出ることに（絶句！）。でも、出ると決めたからには言訳はできない、今できることを精一杯やろうとお稽古に励みました。生来不器用な私が上手く……とまではいなくても、何とか唄うことができました。久しぶりに達成感と開放感に包まれて幸です。

これもみなご指導頂きました布塚先生のお陰です。本当にありがとうございます。これからもご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



神楽坂おおさこの夜

釣 京子

おおさこという店は、神楽坂の奥の、常連に愛される小さな店です。その場の雰囲気というのは、女将さんが作り、常連たちが思い思いに自分らしい時

間を過ごし、またそこに新しい空間というものを作り上げて、おおさこに成っています。

梅雨入り前の最後の週末、その神楽坂おおさこにて、江戸唄と酒のつどいが催されました。いつものおおさこで、江戸唄の会。それは、おおさこ布塚さんとのコラボレーションといったところでしょうか。

私はおおさこの常連というだけで、小唄、端唄の類には、あまり馴染みもなく、ただ、空いていた休日を楽しんで過ごそうとお伺いした新参者なのですが、演奏後の酒宴でいっしょにお酒を飲み交わすことになった会の方に、全く初めての人間の感想は新鮮で面白いだろうということで、一筆書かせていただくことになりました。

午後四時。まだ昼間の熱気が覚めきらない宵の口。開演時間ギリギリに到着すると、いつものおおさこに、いつもではない方々が座って演奏を待っているらしいやいます。開演前のザワザワとした緊張感の中、奥の間にしつらえたテーブルで出来た舞台の上、布塚さんが現れました。ちよつとした曲紹介の後、三味線の音が響き始め、そして、声が発せられた瞬間、その場が一瞬にして変わってしまったのです。ピンと張った空気が三味線の弦のように爪弾かれ、別の空間へと瞬間移動。いつものおおさこが、江戸のおおさこに。粋だのなんだのは、昨今、簡単に言われてしまうのですが（特に神楽坂では、そういった事を売りにした新しいお店も増えています）そう言った表面的なことではなく、ずっと深いところに根ざした、時代を経た人々の想いや、何もかも全て含んだ空間に変わっていったのです。これは、芸術芸能すべてに共通することなんだと思うのですが、その場の気を変える力、それが出来るのだと思います。一瞬にして、場を変えることが出来る人の事を名人と言うのでしょうか。

その後、皆さんで酒宴が持たれました。この時妙に感心したのが、いらしていた方々に男性が多かったこと。現在、日本の文化は、おばさま層（人の事は言えませんが）が担っている、という文化、文化的なイベントには、どこに行っても、ある年齢を越えた女性にしかお会いしません。日本の男性はどこで何をしているんだ？と普段から訝しがっておりまして、ここにいらしたんですね。年齢も幅広く、お話ししても楽しい方々ばかりで、ちよつと嬉しくなっていました。

いい唄を聴き、いい酒と肴に酔う。最高の贅沢ですね。五感すべてが幸せと言っている感じがします。こういう席では、話も酒も弾みます。先程の唄の余韻を肴に、皆が遊び、分かち合う。これぞ酒の喜び、ひいては人生の喜び。なんて言うのは、ちよつと大げさでしょうか。

誠にいい時間をありがとうございました。また、このような場を設けて下さるよう、お願い致します。楽しみにしていますね。

江戸唄の世界に魅せられて

大川 真幸

畳の上に座るとどこか落ち着くのと同時に少し緊張する。儼かな雰囲気というものはこういうことなのだと思ってしまう。始まる前の緊張感と期待感の高まり。部屋のなかの明かりが薄くなり、師匠がお座敷に上がられる。その瞬間、というより師匠が廊下から歩いてきてお座敷に入るまでのわずかな時間だが、すでに、もうその世界に引き込まれ始めている自分が付いた。四畳半に散らばっていた緊張感と期待感は、部屋から醸し出される空気にいつの間にか溶け込んでいた。

三味線の音色、師匠の情緒あふれる歌声。小唄の始まる前にその唄が描かれた背景を師匠が説明してゆく。語り部さんのような優しい口調で、さらにその世界に引き込まれてゆくのがわかる。ひとつひとつに男女のもどかしい心情のストーリーがあり、男性、女性それぞれの気持ちにも共感できる場面がある。文字数にしたら、とても少ない言葉でしかないのに一曲が終わるそのわずかな間に美しくも儚い場面が浮かび上がってくる。何ともいえない懐かしさにも似た、切ないような寂しいような、それでいてどこか高揚感も感じられる。小唄とは、不思議な世界だ。その時代の吉原になど一度も足を踏み入れたことがなくとも、おぼろげにイメージが湧き懐かしさまで感じてしまう。

もしかしたら、日本人が育てられていた環境のなかに知らず知らずとその大地の持つ記憶のようなものがあるのではないのかとさえ思えてくる。自分の生まれた国の文化や風土、何気なく目にしたり耳にしたりしてきたものがそうさせるのかもしれない。僕は自身は、子供の時より、合気道の稽古をしてきた。畳の上での稽古、道場に掲げている日の丸など武道の作法を通じて日本人のもつ礼儀正しさ、気配り、遠慮深さなどを感じてこられたことに感謝だ。

ただ、武道をやっていない人間であったとしても小唄の良さは日本人であればきくと感じる事ができると思う。日本という国のなかで生まれ育ち、例え今まで日本の伝統文化に興味を持ってこなかったとしても、日本の文化とは日本人が心地よく感じられるように出来ているのだと思う。そうでなければ、こんなにも自然に、深呼吸するかのごとく心地よく引き込まれる世界などないはずだ。

正直な話、始まるまでは大袈裟なタイトルだなと思っただが、こんなにも想像力をかき立てられ、情

緒あふれる世界観には限りがなく、その果てしなさはまさに宇宙であった。時には力強く、時にはとても繊細に三味線の弦から鳴り響く抑揚のある音色、ただ単に技術的に高音・低音を使い分けただけでは出ることのできない暖かみのある歌声。曲が始まるときの緊張感は、クラシック音楽の会場のそれと同じだ。咳払いひとつしないで聴き入ってしまう。

もっと多くの日本人にこの素晴らしい伝統文化を感じてもらいたいと素直に思う。体験しその良さを他の人と共有してゆくことで文化は受け継がれてゆくのだから。



素敵なご縁

岡田 芳子

最近「revive」(生き返る、元気づく、復活する)という言葉に惹かれています。折から、この秋三十年有余の昔からのご縁で繋がっている、磯部英子(壺南榮)さんの書の個展を私共のギャラリー「遊朴館」

で開催頂きました。期間中五日目、三味線音楽の西松布詠さん、ピアノの辻人さんのコラボという豪華な顔ぶれのコンサートが予定されていました。

当日の朝十時少し前、英子さんから突然電話があり、「困っちゃったの。想定外の大ピンチなの。三味線の糸巻が折れたの。」と。とにかく代替えを求めて市内の和楽器店をあたりましたが、演奏家にお使い頂けるようなレンタルの三味線はありませんでした。開演までに残されている時間がどんどんなくなっていく。一刻も早く布詠さんに安心頂くのが先決と思いついたその時、ふと頭をよぎった方が、地元・西川流の舞踊家中村征子さんでした。

英子さんと同じく不思議なご縁で、お会いする機会こそなくなっていました。電話のむこうのおつとりとしたお声は昔のままでした。「あら、そうなの。良かったら私の三味線どうかしら？ 気に入って頂けるかどうか分からないけど、とてもいいお三味線なの。最近老化防止に三味線始めたのよ。」

ありがたうお借りすることとし、英子さんには「今か三十分後にはお届けできませんから」とはやる心でお伝えすると共に、奇蹟が起きたとつぶやいていました。

私が電話を掛けたとき征子さんは丁度外出前だったのですが、玄関を開けたまま直ぐの後ろに三味線置いておくからと、ほんの少しタイミングがずれていたから征子さんの三味線にはまみえられなかったのです。英子さん、征子さんそれぞれに昔頂いたご縁が、布詠さんの音色を聞かせて頂くためにリヴァイブしたのです。「素晴らしい方に演奏して頂けて私の三味線も喜んでくれるわ」と征子さんも本当に幸せそうでした。

今、世界中が行方を見失っているように思います。日本の私たち世代も高度成長期を走り抜けた今、不

透明な光景を目のあたりとし、為す術が分からなくなっています。この時期、日本文化に真摯に向き合っている人、おられる布衣さん、英子さん。そのお二人に魅せられた若いピアニスト辻さんと、時に前衛的な調べ。リヴァイヴされた多くのお客様から、「よくやってくれた。ありがとう。お陰でテンションが上がったよ」と握手を求められました。

英子さんのDMからの言葉。『日本の「重心」といわれエネルギー渦巻く飛騨の地』を新鮮に受け止めています。誇りを持ちたく思います。



夢のコンサートホール—暗唱と朗読

小野原 教子

わたしの詩「アユタヤの蜻蛉」を演じてくださるとのこと、布衣師匠より連絡を頂いた。場所は飛騨高山のギャラリーで、一度しかお会いしたことない姉弟子の書家壺南榮さんの恒展会場である。十月二

十六日曜日。ピアニストの辻さんさんと再び共演される。

連絡を頂いたとき、岐阜と長野の県境にある御嶽山の噴火が沢山の犠牲者を出したニュースに心を傷めていた。八月、自分の初舞台となる予定だった岐阜での演奏会を、台風で急遽欠席したわたしにはその土地は遠かった。物理的な距離だけでなく、感情的にも精神的にも大きな山を越えねばならなかった。

親族が岐阜の出身で彫金作家の友人と出掛けることになった。新しい友人と旅行する気分では行かれるに違いない。「アユタヤの蜻蛉」を聴かせて頂くのは、二度目。二〇〇八年秋の東京都庭園美術館での「ニューアンスの会」以来、とても楽しかった。

演奏会は、壺南榮さんのたおやかな作品に囲まれるような空間で行われた。一部は仄かな灯りの畳の間で、古典を中心にした師匠のソロ演奏。「夕暮れ」「鶯啼して」「秋の夜」「さびし」「夢の柳橋」そして松岡正剛さんが作詞された創作曲「織部好み」。耳に馴染んだ曲が多かった。

わたしは目を閉じて、音に集中した。大好きな「夕暮れ」が一曲目。なかなか耳が音を掴めず、かぼそい鳴声のように聞こえた。わたしの聴覚器官が緊張しているのか、師匠の演奏のスタイルなのか。どちらだろう。考えていた。

布衣師匠はお話も上手で、友人もそのことを後で話っていた。一曲ずつ丁寧に面白く解説してくださり、唄の世界に入って行きやすかった。「秋の夜」がはじまると、自分が岐阜に居ること、師匠のお三味線が目の前で鳴っていること、その事実を確かに実感することができ、熱くなった。

細胞の一つ一つに、一音一音を、すべて聞き漏らさないように取り入れたい。神戸に帰って帰りたい。からだに焼き付ける。からだで録っておきたい。そ

んな気持ちだった。演奏中はうつむいてずっと目を閉じていた。

「織部好み」はCD音源で聞くよりも明るく響いた。はじめて購入したお抹茶茶碗が岐阜にはじめて旅行した二十年前で、それは織部だった。そんなことを思いながら、一部はあつという間に終わった。緊張が解けた。

二部、観客であるわたしたちは体の向きを変えた。眩いスタジオライトに照らされ、シックな黒の正装に身を包んだ男女のミュージシャンの登場。自分の背景にあった書が微笑み返していた。今度は二人の背中がそれらが並び、画になって演奏を見守っているようだった。

辻さんのソロ「序章」からスタート。京都の版画家の友人が辻さんのCDのジャケット面を提供した縁で、何度か音楽を聴かせて頂いていた。聴く人を時に拒絶するようではないながら、繊細な旋律に撫でられるような、全体がショーとしても成立する個性的なピアノだった。生の演奏は初めてで、楽しかった。

続いて、師匠の楽曲による名古屋のシニールレアリスト詩人山本博右の「Good night」、ピアノソロ、北園克衛の「Dance」「黒い肖像」、辻さんの「黒髪と沈黙」と続く。楽器と格闘しているように見えるピアノ。しかし楽器と一体化して、またピアノが人格化していくように見える。

十代のとき北園克衛の作品と出逢って、一生詩を書いて行こうと決めたわたしは、師匠と巡り会えたのはこの詩人のおかげだと思っている。もう何十年も演じられているという、わたしも何度耳に入れても大好きな二曲、とりわけ辻さんとの「黒い肖像」は全く新しい曲のように感じられた。

その詩人はつねに海外の芸術家と積極的に交流し

たことを思い出すことができるように、三味線と声とピアノが絡まりながら、海を超えて遠くへ大きな渦になり渡って行くように見えた。離れた近づく、たりしながら重ねてきた二人の呼吸、音がびたり合った瞬間。音は目に見える形で存在した。

最後の曲となる「アユタヤの蜻蛉」。わたしは演奏前に詩を朗読することになっている。一週間程前に師匠より命を受け、「承知しました」とすぐに答えなければならぬ、緊張していた。観客として気楽に旅行するつもりで臨んだが、実はそういう訳には行かなくなっていたのだ。

前夜は宿泊先の古い修道院の中庭で、ひとり星を眺めながら自分の書いた詩を暗唱した。空を仰いでゆっくり歩きながら言葉を覚える。神戸から持参していた美濃和紙にそれを書き写す。水色の紙にふんわり乗せるように貼り付けた。イギリスの光沢のある黒い糸で綴じて、小さな本を造った。

十年前の詩で、暗唱しているうちに少し言葉が変化した。お送りした葉書のなかの短い詩片を気に入ってくださった憧れの音楽家の存在、そして当時の無邪気な自分を思い出していた。

いよいよ最後の曲。布詠師匠はお三味線を脇に置かれ、唄に集中された。すごかった。素晴らしい歌い手だった。こんなに近くで聴いていることがとても贅沢なことのように思えた。潤いと煙めき、重厚感にまるやかさを感じさせるヴォーカリストだった。

「美空ひばり」の名が浮かんだ。師匠を誰かに喩えて語るの、今のわたしの身分ではなおさら不躰なことだとわかってる。日本人の心。そして美しい極東の国にあって圧倒的な存在感。誰かの何かの魂が「西松布詠」という歌手のからだに乗り移っているのか。何度もそくとした。時代を継ぐためには時代を超えようとする意思が必要なのではないか。



子供の頃から親しんだ玩具とルールのない遊びを続けてきたピアノストーわたしは勝手にイメージした「辻人」像には途中からユーモアも加わった。「アユタヤの蜻蛉」に入ったとき、「遊び」がすべて繋がって一つの波、グルーブを作り、会場を巻き込もうとこれまで準備されていたこと、すでにそれはここにきていてうねっていたことに気付いた。みな息をのんでいた。そのとき「書」が動きはじめた。黒い肖像のダンスだ。

声と木と弦と墨と紙によるコラボレーション。わたしの言葉もそれに加えてもらった。自分の言葉であって、それはもうどこかに、独立して、空高く消えていくようであった。言葉は自由だ。わたしよりも。しあわせなこと。

ライブⅡ生きている時間。鼓動し脈動する空間。ある秋の午後。飛騨高山のギャラリー遊朴館は、輝かしい夢のコンサートホールになった。

《今後の予定》

- 二月一日(日) 午後三時 岐阜からや大広間
第十五回 幹事会のつどい
一門演奏会と親睦の宴
- 三月二十八日(土) 十二時半 赤坂クラブ
第四十九回 美紗の会のつどい
一門の演奏会と親睦の宴
- 四月二十九日(水) 国立大劇場
錦会 花柳寿楽一門の会
地唄 黒髪
舞 花柳千壽文
唄と三弦 西松布詠

■たより第79号

発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子
デザイン 近藤 幹則
■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台ブレイス三階

電話 (三三三) 二二二六

(五五五) 二二二二

E-mail: nfe@solei.ocn.ne.jp

URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misas

